

夜の帳が、かつての名門・一条家の栄華を塗り潰すように降りていた。  
カラスの濡れ羽色をした黒髪をなびかせ、一条沙織は一台の黒塗りの車の後部座席で、静かに膝を握りしめていた。

「……月光館」

その場所の名を呟くだけで、肺の奥が凍りつくような気がした。

父の投資の失敗、相次ぐ不祥事。かつての公爵令嬢としての地位は、いまや紙屑同然の借用書へと姿を変えた。そして、その負債の「利子」として指名されたのが、彼女自身であった。  
車が止まった先に聳え立っていたのは、現世の喧騒を拒絶するように沈黙する石造りの館。そこは、若き天才指揮者・黒崎竜吾が築き上げた、美の墓標――。

「ようこそ、一条様。お待ちしております」

車のドアを開けたのは、表情を一切排した男、執事の谷川だった。白手袋に包まれたその手は、まるで生きた人間の体温を拒むかのようなようだった。

館の中へ足を踏み入れた瞬間、沙織は呼吸を忘れた。  
廊下の壁を埋め尽くすのは、歪なまでに美しいルネサンスの宗教画。ガラスケースに収められた、今は亡き職人たちが心血を注いだ繊細なレースや、異国の貴婦人のデスマスク。

「ここにあるものはすべて、主が『完成された美』と認めたものばかりです」

谷川の声が、冷たく高い天井に反響する。

「そして貴女もまた、その一つに加えられることになる」

「……私は、モノではありません」

沙織は震える声を振り絞った。董色の瞳が、屈辱に濡れながらも谷川を睨みつける。  
しかし、谷川は一瞥もくれず、ただ重厚な扉を開け放った。

そこは、月光が滝のように降り注ぐ円形のサロンだった。  
中央の椅子に深く腰掛け、長い指先でページをめくっていた男が、ゆっくりと顔を上げた。

黒崎竜吾。

彫刻のように整いすぎた容貌は、どこかこの世のものとは思えない。その瞳は、沙織の姿を捉えた瞬間、獲物を値踏みする捕食者のそれへと変わった。

「一条沙織……いや、ヴィオロンチェロ。そう呼ぶべきかな」

黒崎の声は、低く、心地よい低音を響かせた。彼は立ち上がり、沙織の至近距離まで歩み寄ると、彼女の細い顎を容赦なく指先で掬い上げた。  
「没落した名門の血。絶望を隠しきれないその高潔な瞳。素晴らしい。これほどの『素材』は、なかなか市場には出回らない」

「……貴方に、私を計る権利なんてないわ」

「権利？ いや、私にあるのは『愛護権』だよ。君という稀代の名器を、二度と変化しない、腐敗しない完璧な形に調律する権利だ」

黒崎の手が、沙織の頬を滑り、彼女の耳元に触れる。

「自由とは、不純なものだ。君のような美しい旋律を持つ魂は、この静寂の中で、私のタクトに支配されている時こそが最も輝く」

沙織は背筋に冷たい震えを感じた。

ここには、救いなど存在しない。

あるのは、狂おしいほどの審美眼に貫かれ、ただ「美」という名の下に解体されていく、美しき監獄の日常だけなのだ。